

シンガポール留学記

農学部生命機能科学科応用生命化学コース 2年 T.I.

私は夏休み期間中にシンガポールの南洋理工大学に留学しました。

シンガポールという国をご存じでしょうか？地図を開いてみるとマレー半島のすぐ南に位置する島国であり熱帯地方に属しています。しかし実際に滞在してみると日本よりも体感温度が低く感じる日が多く、日本の湿度がいかに熱中症に貢献しているかを体験できます。シンガポールは今も昔も多くの人に移住する地域であり公用語が 4 つ指定されています。多くの方がバイリンガルやトリリンガルで、特に大学内ではその割合が校外と比べて高いと感じました。単一の言語しか用いないコミュニティーも存在しますが、ボディランゲージや簡単な英語を用いて対応してくれるなど、外国人にもとても友好的な国でした。

私が参加したコースは英語で大学の授業を受けるというコースで、早い話が神戸大学の前期を一か月延長したようなものです。そのため履修登録を行い自分で行きたい授業を選ぶことができます。前期の延長とは言っても、通う大学が変われば、関西から関東ですら文化に違いがあるのですから、必然的に多くの違いに遭遇しました。例えばクレジットカードの機嫌です。私の留学生活は海外特有の洗礼から始まりました。ズバリ、クレジットカードが止められました。空港から宿泊先までタクシーを利用した際、意気揚々と VISA カードをタッチした瞬間、「ピー！」という警告音とともに決済が拒否されました。現金で運賃を支払うことで事なきをしましたが、財布の中にあった現金のうち 1/4 を使ってしまい、留学が始まったばかりなのに財布の中は留学終了間際の状態になるというハプニングがありました。

もちろん大学でもまた多くの発見がありました。特に印象的だったのは NTU の授業スタイルで各授業に付随する「TUT (Tutorial)」と呼ばれる時間の存在です。この時間は講義では教授が提示する問いに対して学生同士がグループで議論を重ね、答えや仮説を導き出すといった内容のものです。また司会や書記といった役割分担はなく、グループ内で質問に対して事前資料や教科書を基に各自が自由に意見を述べ、疑問や反論があればその場で突き詰めていくという、まるで知能の格闘技のようなお互いに殴り合い高め合う時間でした。TUT で投げかけられた質問を列挙すると、私が参加した Physiology の授業では、「なぜ肌には色があるのか」「人々の肌の色はなぜ異なるのか」といった比較的簡単な問いから始まり、「肌色に自然選択が関与しているかどうか」といった日本語でも答えることが難しい、答えの定まっていない難解な問いが投げかけられました。

私も physiology の TUT に参加させていただきましたが毎回論理的に返答し建設的な議論をすることはできませんでした。さっきほど上げた「なぜ人の肌に色があるのか」などの簡単な問題は私も積極的に意見を述べたり相手が自分の意見に感じた疑問点に対し回答できました。しかし「人間の肌色に自然選択が関与しているかどうか」という答えのない難問に直面すると論理的に自分の意見を説明できず、メンバーに「there may be a language barrier between us」。要するにあなたの「英語は何を言ってるかわからない」といわれました。この出来事は衝撃的であったとともに将来的に PhD を目指すのであれば、日本語で勉強するだけでなく、英語力はもちろん彼らに匹敵する論理的思考力を持つ必要があると痛感させられました。

シンガポールでの 25 日間は、異文化理解につながっただけではなく自分自身が過信していた点や欠点を明らかにしたとともに講義の内容をもとに論理的に考える練習が必要であることを実感させました。たとえ意図が伝わらなくても、専門用語を言い換えるなどして、自分の語彙力を最大限いかしどうにか自分の意図を伝えてやろう！と前向きであったことが滞在中の一番の思い出です。

シンガポールでの写真

